

1. 山城国一揆と城館

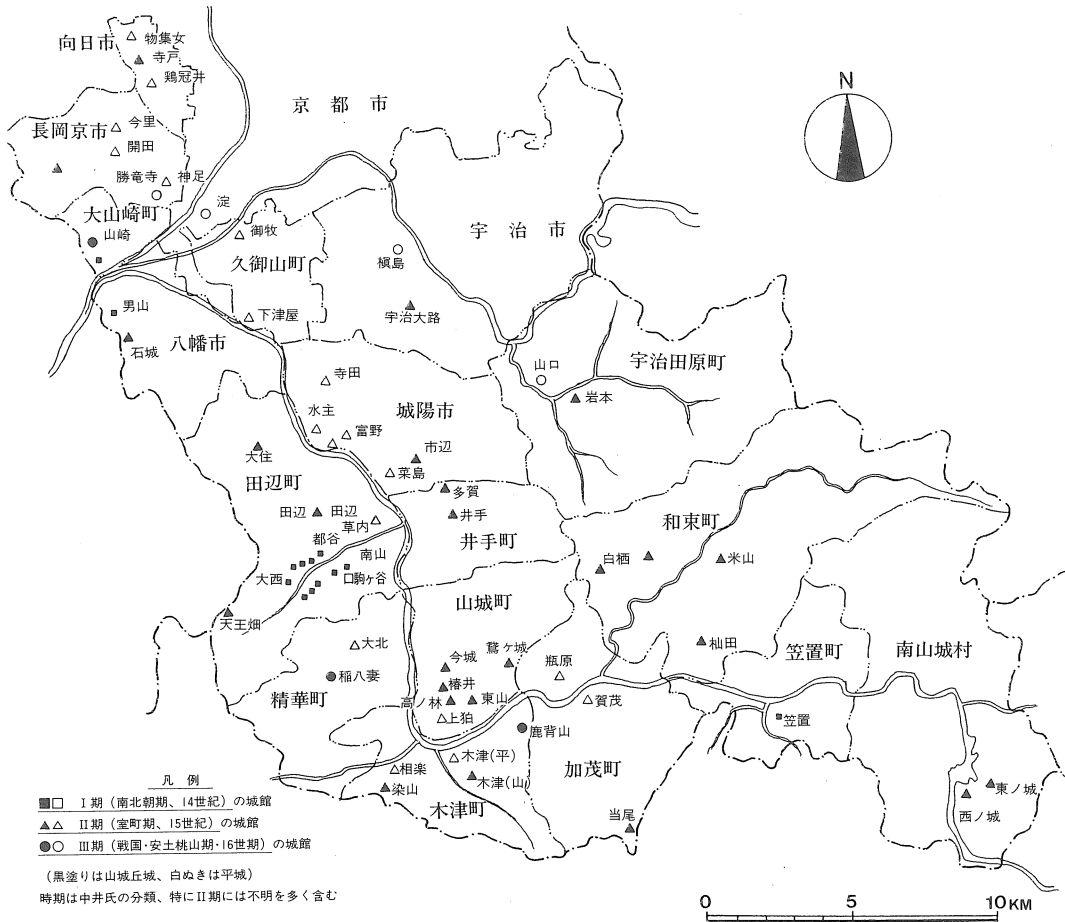
高橋美久二（資料課長）

1. はじめに

文明17年（1485）から明応2年（1493）まで南山城の地で自治を行った，山城国の国人達は，「国中三十六人衆」（『大乘院諸領納帳』）とか「山城国衆廿八人」（『政覚大僧正記』文明17年12月18日条）と呼ばれた。山城郷土資料館では，昭和60年（1985）がこの山城国一揆成立500年に当ることから，「山城国一揆とその時代」という特別展を行った。その際，この時代に山城国人たちが築い

た城とはどんなものであったのか考えたことがあった。本稿は国一揆の時代の南山城の城館の分布と具体的な城館の一部を推定復原して，その特徴などを考えてみたものである。

南山城の中世城館について研究が本格的になったのはつい近年のことである。それまでに，1908年の『綴喜郡誌』，1920年の『相楽郡誌』などの郡誌類に城址の項があって，地元の伝承や史料によって知られる城跡が述べられている。1967年の『日本城郭全集』8（京都）や1980年の『日本城郭大系』11（京



第1図 南山城の中世城館分布図

都)などは府下の城郭を網羅的に扱ったものであるが、南山城の中世城館については現地調査による資料が少なく実態はよくわからなかった。ところが、1982年の中井均氏による『南山城の中世城郭跡』は、南山城の24ヶ所の城館の現地調査による研究成果が載せられ、南山城の城館研究の大きな進展をみた。一方、1977年には田辺町の都谷館^(注1)、1981・1982年に田辺町口駒ヶ谷館^(注2)、1984年に田辺町田辺城跡の発掘調査が実施され、遺構・遺物の考古学的資料による城館の研究も進んだ。

2. 南山城の城館の分布

南山城の中世城館は、乙訓地方を含めればおよそ50ヶ所の所在が文献上から推定される。また文献史料には全く残されていないが、中世の城館とみられる遺構も10数ヶ所存在する。中井均氏の研究によると、これらの城館はⅠ期(南北朝期, 14世紀), Ⅱ期(室町期, 15世紀), Ⅲ期(戦国・安土桃山期, 16世紀)の3期に分けて説明されるという。

Ⅰ期の城は笠置山城が代表にあげられ、これは南北朝の内乱の時期の舞台となった城跡である。この時期の城跡は他に男山城, 鳥取尾城(山崎城)などがある。また、河内から山城への要路であった田辺町普賢寺谷にある中世城館群は、都谷館群や口駒ヶ谷館跡の発掘調査によって、その多くが南北朝期の土豪の館跡群であることがわかった。

Ⅲ期の城は鹿背山城, 稲八妻城, 檜島城などで、Ⅱ期の時代にも存在した城であったが、現在残る城跡は大規模で戦国時代末期に大きく改造された城である。また、山口城, 淀城, 山崎城(天王山城)は安土桃山時代に新たな権力によって築城されたものであった。

Ⅱ期の城館は、Ⅰ期・Ⅲ期以外の城で規模も小さく、戦国時代の城に比べて防禦の構造も未発達なものが多い。この小規模な城館は時期を確定できるものは少ないが、南山城の城館の多くがこれに該当し、Ⅱ期のものと推

定される。そして、この小規模な城館こそが、山城国一揆の時代の国人の城館であったのであろう。

この国一揆の時代の城館のうち、山城(詰城)の遺構はよく残され、現状でもそれと確認できるものが多い。中井均氏の南山城の城館の研究のほとんどはこの山城が対象とされ、24ヶ所の城跡の調査のうち、平城では上狛環濠集落と木津平城のみがその対象となっているのである。この当時、平時の居館は平地につくられ、戦闘状態になった時に山城で戦うということが行われたと考えるのが一般的である。国一揆の時代の城館はこのような山城と平城とを考えなければならないと思われる。

3. 国人と城館

国一揆の時代に、南山城にどれだけ城館の存在が考えられるのであろうか。それには、最初にあげたように、38人衆とか36人衆とか呼ばれた国人の数が参考になる。しかし、この数だけでは、どこに居て、どこに城を築いたかはわからない。このため、別表のような南山城の中世城館と史料を作成した。これは応仁・文明の乱と国一揆の時代を中心に1450年~1500年までの南山城の城館の史料をその城館名の書かれた年に印したものである。それ以前の14世紀と15世紀前半、それ以後の16世紀前半と16世紀後半は50年間の範囲で城館名があらわれれば印をつけた。1450年~1500年の範囲では城館名が書かれていなくても、合戦の状況などで城の存在が推定されるものに▲印、また氏族名または地名として書かれていて、城館を築きうるような有力土豪(国人)の存在が推定されるものに×印で示した。これに使用した史料は、『大乘院社雑事記』(以下『雑事記』と略す)を中心として、『多聞院日記』、『親元日記』、『経覚私要鈔』、『政覚大僧正記』等^(注3)で補った。使用した史料の多くが興福寺関係の史料であるため、興福寺の庄園の多い地域に史料が偏る傾向があり、

付表1 南山城の中世城館と史料

● 城と確認できる ▲ 城の存在推定 × 有力国人の存在

市町	城名・地名（別称，異称等）	14世紀	15世紀 前半	15世紀 四半	一四六〇	応仁乱始 一四七〇	応仁乱終 一四八〇	国一揆成 一四九〇	国一揆解 一五〇〇	16世紀 前半	16世紀 後半	
相模	笠置	●							×	●		
	米山 白栖（森田）											
	瓶原（ミカノハラ，三日原，三日原成彦） 賀茂（カモ，賀茂北） 当尾	●			×	×		×	×	▲	▲	
木津郡	鹿背山 木津（木津執行，木津庄村） 染山 相楽（相楽下司，相楽吉岡，サカ中，相楽新） 吐師（ハセ） 市坂（一坂）		×		●×××	×	●●	●●×	××▲×	××××		●●
	菅井（スカキ） 祝園 稻八妻（稲屋ツマノ，イナ屋ツマ） 大北（下狛大北，下津狛庄村，シモコマ） 大南（下狛大南） 菱田					×	×	▲	▲	×	×	▲▲
	上狛（狛，狛下司，狛東，狛山城守） 高林（高之林城，鷹林ノ城） 椿井 平尾（平生，ヒラウ，今城，キマ城） 綺田（綺庄，カタハ）			●×		×	×	▲▲	×	×	●●	●
綴喜郡	井手 井手（井手別所，キテ城，別所寺ノ城） 多賀（高，タカ）					×	▲	×	●			
	草内（草路奥，草路，草内政所） 普賢寺 田辺（多那郡別所，田ナヘ） 大住（大角） 天王畑 薪					×	●	●×		▲	●	●●
	岩本 山口									●		●
八幡	男山	●										
	久世郡	市辺 粟島（北粟嶋，南粟嶋，ナシマ） 琵琶庄（ヒハ） 水主（御厨子，ミツシ） 富野（トノ，戸野，外野） 寺田（テラ） 久世（クセ）						●	●●	▲	×	●
御牧 下津屋					×			▲	×		●	●
横島 宇治（宇治大路，大路）					×	×	×	×	×	●●	●	●

付表2 南山城の室町幕府番衆

番帳名等	氏族名	久世	下津屋	真木嶋	宇治大路	水主	推定年代	出典
① 文安番帳		○					文安元～同6 (1444～1449)	『群書類従』巻511
② 永享番帳		○					享徳2～享徳4 (1450～1455)	『群書類従』巻511
③ 久下文書番帳			○	○			長祿3～寛正6 (1459～1465)	『室町幕府解体過程の研究』
④ 長享着到		○	○	○			長享元年 (1487)	『群書類従』巻511
⑤ 京大番帳		○	○	○	○	○	明応元～同2 (1492～1493)	『室町幕府解体過程の研究』
⑥ 貞助記詰衆五番組(A)			○			○	永祿2～同4 (1559～1561)	『室町幕府解体過程の研究』
⑦ “(B)		○	○				大永年間～天文4 (1521～1535)	『室町幕府解体過程の研究』
⑧ 永祿六年諸役人付(前)			○			○	永祿6～同7 (1563～1564)	『群書類従』巻511
⑨ “(後)		○	○	○	○	○	永祿9～同10 (1566～1567)	『群書類従』巻511

これが南山城の国人と城館の全体像であるというわけにはいかない。しかし、これにより、南山城の城館と城館を築きうるような国人の分布の概要はつかめると思われる。

この表にはあげられなかったが、南山城にはこの他にも有力土豪が居たことがわかる史料がある。それは、「番帳」と呼ばれる室町幕府の奉公衆の交名を表したものに、南山城の地名を冠した氏族名がみられる。今谷明氏^(注4)の研究による番帳の推定年代とともに、南山城の氏族名を表にすると付表2のとおりとなる。これらの氏族も、山城国一揆に際しては、有力国人の一人として名を列ねたことが考えられる。

これらの表によって推定される城館と史料にはないが城館の遺構の残るものの分布を示したのが第1図である。

4. 城館の復原

さて、それでは国一揆の時代の城館はどのようなものであったのであろう。中井均氏によって、この時期の戦闘時の山城については具体的に明らかにされてきたので、ここでは平城を中心にして具体的に復原を試みてみたい。

(1) 下狛大北城

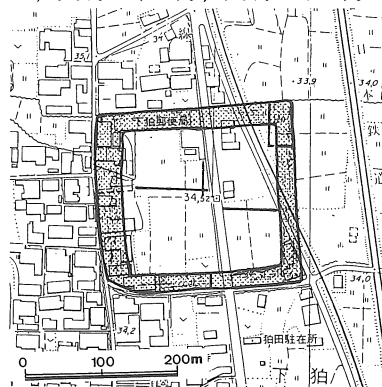
下狛大北城がはじめて史料にあらわれるのは、応仁・文明の乱の最中の文明4年(1472)のことで、『雑事記』10月16日の条に東軍方

の大和国人筒井氏が「下狛之大北之城」へ打ち寄せ、大内代官杉十郎を責め落としたとあるのがそれである。

この下狛大北城はもともと地元の国人下狛大北氏の居城であったが、文明2年(1470)に西軍方に味方する大内政弘軍が周防国から南山城に侵攻し、この下狛大北城を攻め落として入城した。以後この下狛大北城は、南山城における西軍方の拠点となった。

一方東軍方に属していた下狛大北氏は、居城を追われた後の文明3年(1471)山城椿井山上に新たに構えた城に、狛下司、普賢寺中、田那部別所の各氏と立て籠り、大内氏と戦うが敗れる(『経覚私要鈔』)。

文明4年(1472)10月、東軍方のまきかえしによって、一度は奪還した下狛大北城も、再び西軍のもとに落ちた。その後、下狛での戦いは、文明7年5月、文明9年10月などの



第2図 下狛大北城(?)復原図
(精華町現地説明会資料による)

記録はあるが、下狛大北城は大内の代官杉氏の城として、西軍方の拠点となっていた。しかし、文明9年11月、大内氏は、下狛大北城など、山城国の西軍方の拠点としていた城を焼き払い、国許へ引きあげた。これにより、応仁・文明の乱が終結した。

この後、下狛大北氏の活躍は度々記録されるが、下狛大北城と書かれた史料はみられない。下狛大北氏は古巣に帰り大内氏に焼かれた城を修理し、国一揆を迎えることとなったと思われる。

この下狛大北城跡については、『相楽郡誌』に「古城墟 狛田村大字菱田 面積凡三百坪 許旧と城垣外と云今世改めて前川原と云へり、城隍の跡今尚彷彿たり」とあるものに比定されることが多かった。これに対し、奥田裕之氏は、従来稲八妻城跡に比定されていた精華町北福八間小字城山の城跡を大北城跡に比定された。いずれも、大字下狛の中に求めない説であるが、当時にもすでに稲八妻、菱田、下狛は別々の集落であり、それぞれに城館をつくるべき国人の存在がうかがわれることは先にみてきたとおりである。したがって下狛大北城跡は精華町大字下狛内に比定すべきであろう。

ここで思い当たるのが、精華町史編さん委員会によって、昭和59年11～12月に発掘調査された「下狛廃寺」の調査成果である。これは大字下狛小字拝殿、浄楽などの現下狛集落の東北部分の平地部で実施された発掘調査で、一辺120mにわたって四周を大規模な堀で囲まれた遺構が検出された。^(註5)この堀は、幅9m以上、深2mにも及ぶもので、きわめて防禦的性格の強いもので、まさに城館とよぶべきものである。調査者は当初白鳳時代の瓦を出土することで知られた下狛廃寺の遺構を求めて調査に臨んだものであった。しかし、調査の結果は、白鳳時代～奈良時代の須恵器など若干の古代のものを含むが、大半は平安時代末～室町時代のものであった。とくに中世遺

物が多いことが特徴で、調査者は古代の下狛廃寺の遺跡ではなく、調査地の南にある若王寺との関係の中で検討して行くべきとの見解が出されている。

筆者はこの遺跡こそ下狛大北城の遺構であろうと推定している。それは、第1にこの遺跡が大字下狛の中にあるというだけでなく、その位置が下狛の中で北寄りにあることである。当時の史料に下狛には大北氏の他に大南氏、大西氏などの存在があり、その氏族名は拠点とした位置によると思われるからである。第2点は、その遺構が方形単郭という単純な形をしており 国一揆以前の城館の形態をしていることである。

(2) 草内城

草内城がはじめて史料にあらわれるのは、応仁・文明の乱の終結後、5年目の文明14年(1482)のことである。『雑事記』同年12月27日条によると、東軍の畠山政長の命により、狛下司・炭竈などの東軍の軍勢を「草路城」に集結させて、河内方(西軍畠山義就方)の侵攻に備えさせたが、河内方に責め落とされ、数十人が切腹させられたというものである。この草内城の戦は、文明9年に西軍大内方の山城国からの引き上げにより終結したかにも似た南山城の戦乱が、再び開かれた時の口火を切る戦であった。

この草内城の戦以後、南山城への西軍方の侵攻が続き、文明17年(1485)10月の久世郡南部での両軍の対峙によって、ついに山城国一揆が起こることとなる。

この草内城で山城国一揆前の戦端が開かれることとなったのは、この草内城の立地によることである。というのは、この草内という地は河内と山城を結ぶ重要な交通路であった普賢寺谷の入口にあり、山城衆(東軍方)が河内衆(西軍方)の侵攻を迎えつつに絶好の位置を占めていたためであろう。

草内城はこの時東軍方の拠点となったが、もちろん本来は国人草内氏の居城であった。

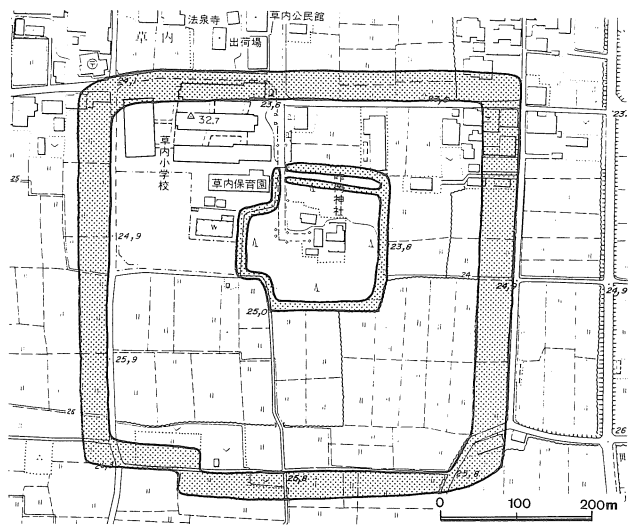
草内氏は、文安4年(1447)の興福寺と東大寺の争いに参加し、山城衆40人ほどが討死した中に「草内奥」氏が入っていた(『経覚私要抄』)他、寛正6年(1465)幕府から稲八妻公文進藤氏の誅戮が命じられた山城国衆の中に「草内名主沙汰人」としてあらわれるなど、山城国十六人衆のうちの一入田辺氏などと行動を共にしている様子が窺われる。

草内城の構造についての有力な史料もある。それは『多聞院日記』の文明10年(1478)11月11日条に「草内政所事、城之^(堀)屈之橋引テ此間ハ隠而内ニ在之云々」とあって、草内城の堀に架けられた橋が移動式のものであったということがわかる。

草内城跡については、『日本城郭大系』などでは、「恐らく草内集落を城と呼んだものと考えられる。特に遺構も残っていない」と書かれている。ところが大字草内小字宮ノ後に所在する^{くいのおか}昨岡神社前に田辺町郷土史会によって建てられた説明札にはこの神社境内が山城国一揆時代の草路城跡であると記されている。

昨岡神社の境内は現在東西70m、南北90mの方形の区画に西側に東西20m、南北40mの突出部のある凸形の形をなし、周辺に土塁・堀が良好に残っている。北辺には堀が二重にめぐらされた様子も窺われる。中央にある社殿の部分は一段高く土盛がされていて、まさに中世の城館の面影をよくとどめている。地元の話では、この昨岡神社周囲の堀を、現状では溝のように細くなっているにもかかわらず、「ホリ」と通称しているとのことである。またこの溝のような堀も昔はもっと広く深かったと伝えられ、現在でも幅5m以上ある部分もある。まさに中世の城館と考えてよい遺構である。

ところが、この昨岡神社周辺の条里遺構の



第3図 草内城復原図

遺存状況を観察すると、さらに一まわり大きい城郭の遺構がありそうである。この草内付近は条里遺構が整然と残されていることで古くから知られ、研究も進められてきた。この昨岡神社周辺には現在も条里遺構がよく残り、坪地名も残っていることから容易に条里の復原が可能である。しかし、昨岡神社を中心とする二町四方内については、条里の条界線・坪界線が通らないのである。地形を観察すると東辺、南辺には幅10m前後の堀跡の痕跡が水田の畦畔に残っている。北辺・西辺の痕跡は明瞭でないが地割等からみて第3図のような、二重構造の城郭が復原される。外郭は東西約245m、南北約250mとなる。

ここで、この復原に参考となる史料がある。それは、昨岡神社の宮座の一つである奥西大夫座文書の中に「山城国草内村宮神之記」があり、その中に「惣境内二丁四方惣堀横二間深二間」^(注6)とある。この文書は写の文書で、「延久二年三月二十六日」など平安時代の年号のあることなどから検討の必要もあるが、いつかの時点での昨岡神社の様子を伝えているものと考えられる。今回復原した城館にほぼ近い規模を伝えているのが興味深い。

(3) 瓶原城

瓶原(貳原, 三日原)城と書かれた史料は管見では見当たらない。ところが、この瓶原の地には、付表1でもみたように城館を築きうるような有力国人が存在していて、国一揆の時代にも活躍していた。

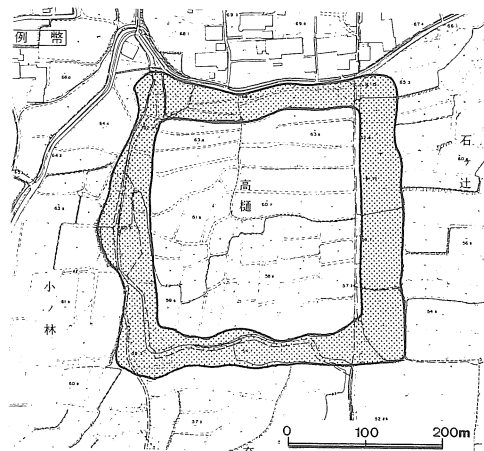
寛正6年(1465)には幕府から「貳原名主沙汰人中」あて稲八妻公文追討の命が下されたり(『親元日記』)、文明11年(1479)には「三日原之大西」が河内国で討たれ、文明16年(1484)には「三日原之西田兄弟」など6人が殺されたがこれが「三日原之侍共」の所行とされている。また、この瓶原の地は大和国人達が没落した時の逃避先となっていた。明応2年(1493)4月には郡山城の筒井氏が、明応7年(1498)には古市父子が三日原に落ちのびている(以上『雑事記』)。このことから、大和の有力国人を受けいれるような館が瓶原にあったということになる。

永祿12年(1569)4月20日付の「瓶原七人衆」あての信長朱印状があり、この時期には瓶原には七人の有力者が居たこととなる^(注7)。そのうちの一人に「炭竈^(竈)氏が居たという所伝がある。文安元年(1444)に、「貳原炭竈」などが楠葉入道らとともに大乘院経覚に供奉して上洛した。(『経覚私要鈔』)

康正3年(1457)には大乘院家防人名字の中に「炭竈山城国住」として記される他、応仁元年(1467)には関の知行をめぐって「山城炭竈」の名がみえる。また先にみたように、文明14年(1482)の草内城の合戦に炭竈氏は狛下司とともに東軍方として参加した。(以上『雑事記』)

以上みてきたように、瓶原には複数の国人がいたようであるが、その中で最も積極的に国一揆の時代に活躍したのが炭竈氏であったようである。

瓶原は現在の相楽郡加茂町のうち、木津川北岸一帯を総称する地名で、古代以来使用されてきた。天平12年(740)にはこの地に恭



第4図 瓶原城復原図

仁宮が造営され、それが天平18年(746)には山城国分寺に変わっていく。この恭仁宮の東北部分の、加茂町大字例幣小字高樋に中世城郭と思われる遺構が残っている。その遺構は、西辺と南辺の堀跡で、周辺の地形が西北から東南に傾斜するのに対し、この堀は正南北・正東西方向に掘られている。西辺の堀は幅約20m、深さ4.5m、全長約180mあり、南辺の堀は幅約20m、深さ5m、全長約160mを測る大規模なものである。この堀で囲まれる東北部分の地形は、周辺の水田が地形に沿って東北から西南に細長いものがつづいているのに対し、東西方向の水田区画を呈するものが多く北から南に段々の水田となっている。この堀の内側の範囲であるが、北辺・東辺の堀の痕跡が明瞭でないので断定しがたいが、中央部分の東西方向の水田区画が続かない部分に堀状の水田区画がみとめられるので、第4図のように復原してみた。

この堀に囲まれる方形区画は、東西約140m、南北約150mある。この区画について、かつて、恭仁宮東北にあった石原宮(『続日本紀』天平十五年正月壬子条他)の跡ではないかと推定したことがあった。

昭和60年度の恭仁宮跡の発掘調査は、この方形区画周辺で行われた。その結果、この周辺では、水田床土下に新しい時期の土石流が多く、遺構の大半が残っていなかった。その

ため、この方形区画の性格を明らかにすることはできなかったが、東辺の堀と推定した部分に入れたトレンチ内では、堀状の遺構はみつからず、東端で地形の下る状況が確認された。このため、堀とみた地割はあるいは土塁の存在を示した地割で、堀は水田もう1枚分東側に存在するものかと推定された。

以上の方形に堀をめぐらす城郭遺構については、部分的な発掘調査ではその性格を明らかにすることはできなかったが、その規模・構造から中世の城館とみられる。しかし、それが、瓶原のどの氏族のものであったかは確定できない。恭仁宮跡では、この他にも大きな堀状の遺構が確認されたことがあり、地元では城と言いつける部分があるとのことである。伝承のように、瓶原七人衆と呼ばれた地侍達の館が他にも埋もれている可能性がある。

6. おわりに

以上国一揆の時代と推定される平城を具体的に3例をとりあげて検討してきた。平城の遺構の追跡はきわめて困難なことが多く、不確定な要素が多い。最近、中井均氏も国一揆の時代の平城である水主城の復原研究を試みられているが、やはり困難さは同様である。山城国の平城の調査は緒についたばかりで、不確定要素が多いため、その特徴をあげるには至らないと思われるが、この調査を通じて思いついたことをあげてまとめたい。

まず第1に、表1の南山城の中世城館と史料で検討したように、国一揆の時代の舞台となった城館は、基本的には平城であった。すなわち、国一揆の時代の舞台となった多くの場所、例えば、草内、水主、寺田、外野（富野）などのほとんどは全く丘陵をもたない集落で、そこにあった城は周囲に堀をめぐらした平城（環濠集落）であった。これは、山城を築きうる丘陵がある集落においても同様であったろうと思われ、山城はあくまで臨戦的なものでしかなかったであろう。

次に、その構造についてみれば、方形単郭かまたはそれに近い単純な形のものであったことである。山城では木津城しか方形単郭のものはみられないが、井手城なども地形から方形城郭は築けないが、きわめて単純なものである。逆に複雑な構造の城跡は後世特に戦国時代の手が加わっているとみるべきかも知れない。

さらに、その規模についてみれば、きわめて小規模なものが多いことである。西軍方の侵攻に備えて、東軍勢が結集した草内城でさえ、大きく考えても一辺250mほどで、大和国の有力国人の城や山城国の後の時代の城に比べるとはるかに小さい。応仁・文明の乱の際に、西軍方の拠点となった下狛大北城や水主城（水主城の場合は後の国一揆の時は東西両軍の争奪戦の的となった）も草内城より小さい。これは、山城国の場合は傑出した国人がいなく、他国にまで侵攻していく国人や後に戦国大名に成長していくような国人がいなかったことにもよっていると思われる。

（注1）同志社大学校地学術調査委員会『京都府田辺町都谷中世館跡』（1977年）

（注2）田辺町教育委員会『南田辺町地内試掘調査概報』（1982年）

（注3）本表は地名・人名だけの場合（×印）一部省略した。また、まだ脱漏も多いことと思われる。今後補訂していきたい。なお史料検索にあたり、当館田中技師の応援を得た。

（注4）今谷明『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店、1985年）

（注5）町史編さん係「下狛廃寺発掘調査について」（精華町文化財愛護会『文化財愛護会だより』2号、1985）

（注6）田辺町在住松村茂氏の教示による。

（注7）永島福太郎「山城国衆の基盤」（『地方史研究』8号、1953）